

三好三人衆が籠城し織田信長に対抗 の だ じょう ⑧ 野田城	【所在地】福島区野田・玉川 【標高】-1 ~ 0 m 【年代】享禄4年 (1531)、元亀元年 (1570) 【城主】浦上村宗、細川昭元、三好長逸・康長・正勝 【交通アクセス】OsakaMetro 玉川駅すぐ	
---	---	---

【概要】元亀元年 (1570) の野田・福島合戦における三好三人衆方の拠点であり、それ以前の大物崩れの戦いや、以後の大坂冬の陣でも使用された可能性がある。

【立地】低湿地である南中島地域に位置している。野田城跡伝承地の発掘調査成果を参照すると、15 世紀から 16 世紀にかけての洪水によって離水し、適宜排水用の溝が掘削されて開発されていったと考えられる。北に位置する海老江や浦江よりも陸化の時期が若干遅れる（櫻田 2023）。

【歴史】渡辺武の論稿（渡辺 1977・1995）に学びつつ、文献史料に見える野田城の変遷をまとめる。享禄 4 年 (1531) における細川晴元と三好元長の合戦の際に三好方の浦上掃部が野田・福島へ陣取った（⑧-1、2）が、これ以上の記述が無いため詳細は不明である。野田城が歴史上最も注目されたのは、元亀元年 (1570) の野田・福島合戦における三好三人衆の籠城である。畿内での勢力挽回を図る三好三人衆は、同年 7 月に天満森、次いで野田・福島に移る。8 月 17 日には古橋城（門真市）を攻略している（⑧-12）。『信長公記』によれば、野田・福島には細川昭元、三好長逸・康長・正勝らを大将とする 8,000 人が立て籠もったという（⑧-11）。『細川両家記』は、野田・福島の様子を「阿州にて相定む如く、野田・福島に猶以て堀を掘り、壁を付け、櫓を上げさせ、河浅き所に乱杭・逆茂木引き、当所へ盾籠らるるなり」と記し、堀・壁・櫓・乱杭・逆茂木を備えた城郭を構築していたとする（⑧-12）。元亀元年の野田・福島合戦より後の大坂本願寺合戦における野田・福島の城について記した文献は見つかっていないものの、織田軍が本願寺を包囲した天正 4 年 (1576) 以降は野田・福島も織田方の手に落ちたと考えられる。その後の野田・福島の城についてはほとんど不明であり、廃城となっていた可能性もある。ただし、『西成郡史』や、参謀本部『大坂役』には、大坂冬の陣に際して大野道犬が棚楼（井櫓の意味か）を福島の五分に設け、800 人で野田の新家を守ったとある（⑧-19、⑩-8）。

【評価】図 18 は、明治 19 年 (1886) における野田村の地籍図（大阪市建設局蔵「明治拾九年六月大阪府管下摂津国西成郡野田村地図」）から作図した字の位置図である。野田村の居村域は「城ノ内」「奥」「村良」「堤」「大北」「弓場」から構成される。うち「城ノ内」「弓場」は城館との関係が推測されることから、近世における野田村の居村あたりに野田城の存在が推定されてきた（岡倉 1973、藤 2012）。居村域は現状で微高地となっており、その微高地は発掘調査成果を踏まえると中世に遡る可能性が高い。また、発掘調査地点のうち N007-1・2（櫻井 2008、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2008）と N012-1・2 次調査（大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2014）では堀状遺構が検出されている。N012-1・2 のものは厚さ 20 cm ほどの盛土層を掘り込んで造られており、幅 4.4 m 以上、深さは 1.3 m 以上を測る（図 18）。N007-1・2 のものは深さ 1.0 m 以上、幅 3.0 m 以

上を測り、17 世紀前半に埋没する。N015-1 次では調査区が堀の内部に当たる可能性が指摘されている。積山洋は、この 3 地点の成果をもとに、野田城を圍繞する堀の範囲を推定した（大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2023、図 18）。この図に従えば、野田城は東西 280 m ほどの広大な城域を有していたことになる。これらの堀が同時に存在し一体的に機能したかどうかは今後の調査成果にゆだねられるものの、仮に一体的に機能したとすると、かなり大規模な城であったといえる。ただし、この範囲に円満寺や極楽寺、野田戎神社などの寺社が立地していることを踏まえると、この範囲を単純に野田城の範囲にとらえることは躊躇される。すなわち、宗教的な紐帯によって結束した野田の村人たちが、環濠集落を形成していた可能性も考えられるからである。また、このような環濠集落の堀と、武家権力による野田城の堀が併存した可能性もあるので注意が必要となる。今後の発掘調査の進展により、野田城ならびに野田村の構造が解明されることを期待する。〔岡本〕



図 17 堀状遺構 (N012-1・2) ※向かって左は発掘調査トレンチの壁である。

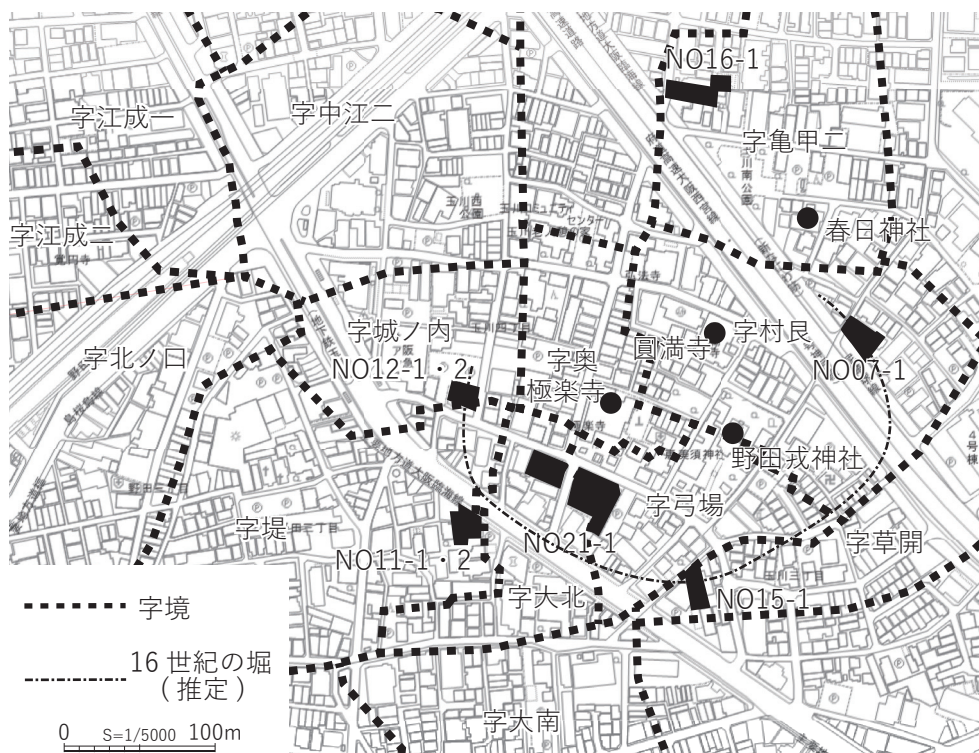


図 18 野田村における小字と発掘調査の位置

(堀の推定位置は大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2023 より)

織田信長が布陣した最前線の付城

⑨ 海老江城

【所在地】福島区海老江

【標高】0～1 m

【年代】元亀元年(1570)

【城主】大坂本願寺、織田信長

【交通アクセス】阪神本線淀川駅すぐ



【概要】元亀元年(1570)の野田・福島戦における軍事拠点であり、三好三人衆ならびに本願寺方と織田方によって争奪の対象となった中島地域の城郭群の1つと思われる。元亀元年(1570)の野田・福島戦の際には織田信長が布陣した。今回、当館所蔵絵図の記載から場所の比定に至った。

【立地】中津川に面した低湿地にあたる。海老江遺跡の発掘調査成果によれば、14世紀末～15世紀には氾濫堆積層により離水し、排水用の溝が掘削されて耕地化したと推定されている(大庭2017、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018b)。現淀川の南側を北東―南西方向に延びるリッジ南側の低地に位置している(櫻田2023)。

【歴史】海老江の陣は、元亀元年(1570)9月の野田・福島戦の際に史料上に現れる。『言継卿記』元亀元年9月9日条には「昨日海老江を三好左京大夫・松永山城守取之」とあり、織田信長方の三好義継・松永久秀が本願寺方から海老江を奪取したことがわかる(⑨-1)。『信長公記』には、足利義昭と織田信長がともに海老江へ布陣し、敵方の野田城を攻めた様子が記される(⑨-3)。また、『尋憲記』同年同月14日条には「海老江へ信長陳取、松城者野田之近所一チャウ計チカク陳を寄由也」とあり、信長は海老江、久秀は敵が籠る野田の近くにそれぞれ布陣していた(⑨-2)。さらに、『細川両家記』には海老江の陣の所在地に関する具体的な記述があり、「海老江堤田中に陣屋懸られ候也」と記されている(⑨-4)。海老江にある「堤」とは、中津川の堤防のことと思われ、織田信長による海老江の陣は、中津川の堤防に接した田圃のなかに存在したと推測される。

【評価】大正14年(1925)刊行の『鷺洲町史』は、元亀元年における海老江の陣の位置を、延宝5年(1677)検地の記録にみられる「川がかり古城」という字地に比定したうえで、付図において現在の淀川大橋付近に「元亀元年織田軍陣地址」の記載をする(⑨-6、図19)。ただし、根拠とされる延宝5年検地の記録の詳細が不明であり、その位置の妥当性を検証することは難しい。そこで、「摂津国西成郡海老江村絵図」(大阪歴史博物館蔵、図20)を参照する。本図は江戸時代の末頃に作成されたと考えられ、海老江村の土地利用や字を詳細に記している。「字古城」の記載は、中津川の堤防に接した田圃に位置しており、『細川両家記』の記述に一致する。また、「古川渕」と呼ばれる入り江に面しており、水上交通に便利な場所であった可能性がある。この場所は、明治29年(1896)から始まる新淀川開削工事で淀川の川底ないしは堤防となっている(図21)。『鷺洲町史』の比定とはやや異なる位置となったが、絵図の測量精度の問題で今後修正される可能性もあり、引き続き新出の発掘調査成果などを参照していく必要がある。[岡本]



図19 『鷺洲町史』付図より「元亀元年織田軍陣地址」

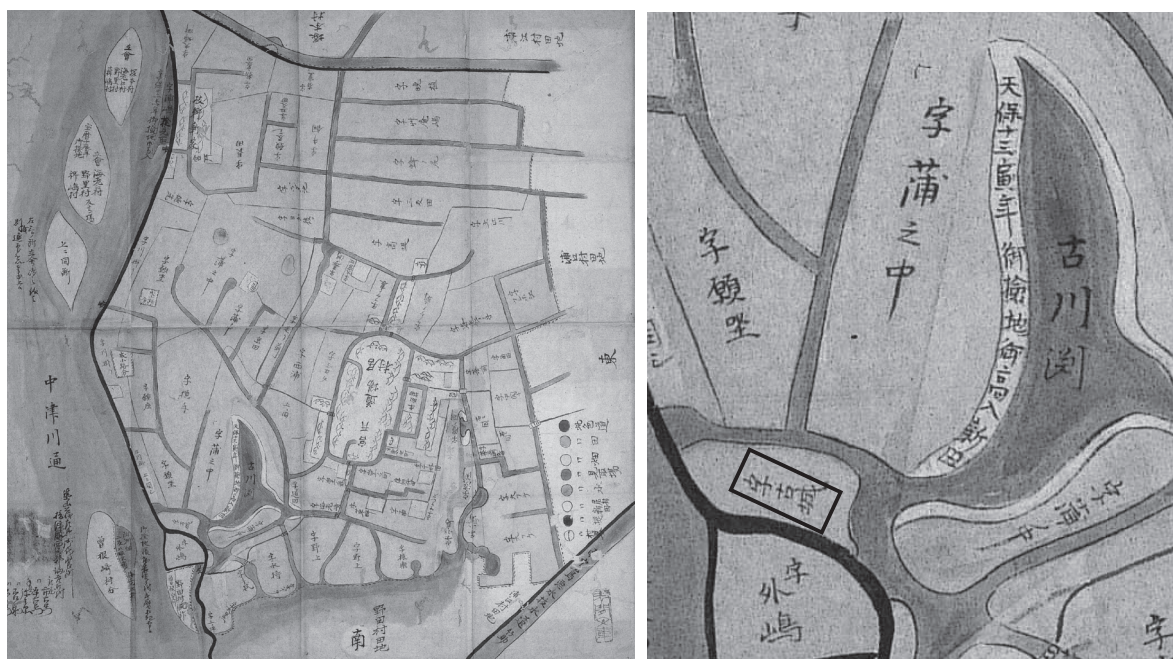


図20 摂津国西成郡海老江村絵図(大阪歴史博物館蔵)より全図(左)と「字古城」部分(右)

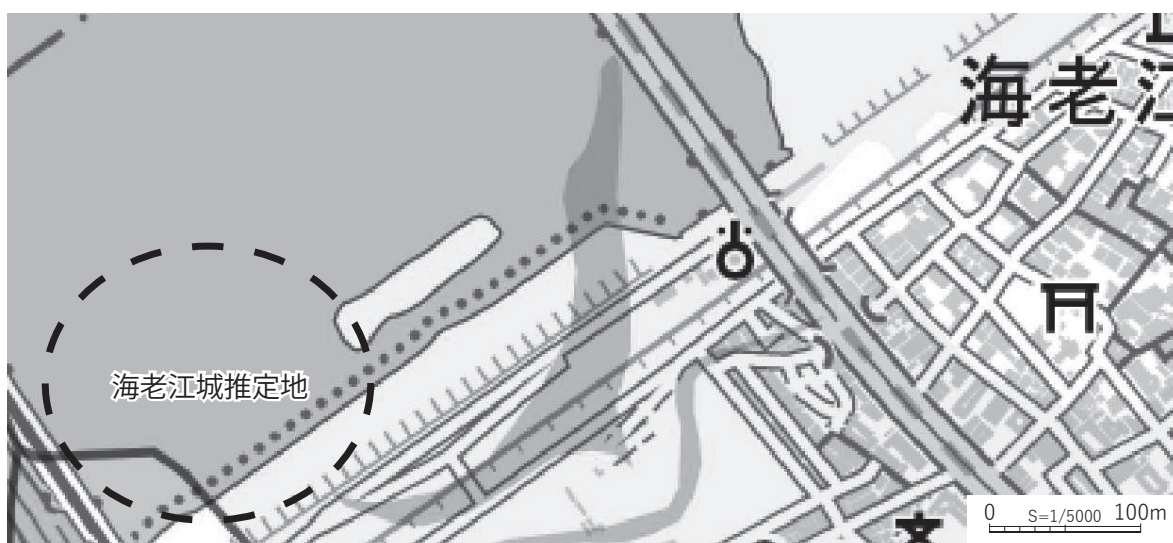


図21 海老江城推定位置(地理院地図「明治期の低湿地」に加筆)

野田城と一連の城か

⑩ 福島城

【所在地】福島区福島（詳細位置不明）

【標高】0～1 m

【年代】享禄4年（1531）、元亀元年（1570）、慶長19年（1614）

【城主】浦上掃部、三好三人衆、大野道犬

【概要】「野田・福島」という組み合わせで史料上に現れる福島城は、その位置等の詳細が不明である。

【立地】福島は南中島に位置しており、近世には蜷川を隔てて堂島と接していた。西で野田と接している。

【歴史】文献上において「野田福島」として、野田とセットで登場することが多い。したがって、福島の動向は野田と連動していることが多いと想像される。享禄4年（1531）に三好方の浦上掃部が布陣した野田福島の砦（⑩-1）については、享禄年中に三好氏が築いた「福島堡」として伝承されていたことが『摂津志』から読み取れる（⑩-6）。元亀元年（1570）における野田・福島合戦でも野田とともに三好三人衆方の拠点となる。その際、織田軍が「福島堤」を鉄砲で攻めたことが記される（⑩-4・5）。大坂冬の陣の際には、大野道犬が福島の五分一に棚楼を設けたことが伝承される（⑩-8）。

【評価】福島城の所在地に迫る手掛かりは、現状ではほとんど知られていない。ただし、史料上で野田・福島のセット関係が強調される事実を重視するならば、野田と福島は切り離すことができない、あるいは切り離す必要のない一体の地域として認識されていたと考えられる。福島は東西に細長く、近世には東側の上福島村と西側の下福島村に分村している。野田と福島が一体の地域と認識されることを踏まえれば、近世における下福島村は野田村から近い位置にあり、福島城の所在地としてふさわしいかもしれない。〔岡本〕

木津川河口部を扼する拠点

⑪ 木津城

【所在地】浪速区敷津西～西成区出城

【標高】1～2 m

【年代】天正4年（1576）～慶長20年（1615）ころ

【交通アクセス】JR 今宮駅・OsakaMetro 大国町駅下車



【概要】木津は木津川河口部にあり、一帯は中世では四天王寺領だったが、15世紀末に願泉寺・唯専寺を中心とする本願寺の勢力が浸透し、天正4年（1576）と6年（1578）には織田信長軍との二度にわたる木津川合戦の場となった。また慶長19年（1614）大坂冬の陣では徳川方の陣が置かれた。

【立地】木津集落は大阪湾に沿って成立した浜堤の上に位置する。この浜堤は7～8世紀に形成されはじめたと考えられており、12世紀頃まではおおよそこの浜堤の西側に海岸線があったと推測されている。この浜堤西側の低地は、13世紀以降、浜堤北西端に位置する浪速元町遺跡（NK01-1）を皮切りに陸地化を遂げたことが確認されているが、土地利用としては耕作土であってもすべて近世以降であると指摘されている（南 2022、図 22）。

木津城については、『西成郡史』が「其址今詳かならず」（⑪-9）とする一方、『大阪府全志』は



図 22 難波・木津地域周辺の耕地化の時期(南 2022)

「字出城」（西成区出城）に比定する（⑪-10）。「字出城」は旧木津村集落から南へやや離れた木津墓地に隣接している。ここは大正初期の耕地整理により区画が一変しているが、もと畑地だったという。なおその周辺には城郭を思わせる他の字名は認められない（大阪府西成郡今宮町 1926）。

なお中世段階の木津集落については木津川河口部から東へ広がる入江（のち鼬川）に面していたと考えられる。

【歴史】木津城が歴史上登場する最初は、元亀元年（1570）～天正8年（1580）の大坂本願寺合戦における、天正4年（1576）の木津川口合戦である。天正4年（1576）4月、織田信長は大坂本願寺へ達する重要な補給路である木津川口の封鎖を荒木村重らに命じた（⑪-2）。逆にいえば15世紀末には本願寺末寺が置かれた木津は海と河川をつなぐ物資搬入拠点として、本願寺は死守すべき地点だったのである（大澤 2023）。

この戦いの焦点となったのが木津の「城」である。ここをめぐって両者が激突し、信長方部将の原田備中守が討死したほか、本願寺方一揆勢にも大きな人的損害が出たと伝えられている（⑪-3、4、5）。ただし、この「城」表記については、天正6年（1578）にもおこなわれた二度目の木津川合戦時の史料には一切登場せず（⑪-6）、天正4年（1576）時に限定されたものとなっている。

慶長19年（1614）11月の大坂の陣時にも「きつか城」は登場する。山内忠義・鍋島勝茂が普請を命ぜられたことがわかっており（⑪-8）、その少し前には伊達政宗も木津へ陣を構えることが指示されていた（⑪-7）。11月8日に徳川方は大坂城を包囲する付城の設置を決め、その普請を命じており（『駿府記』）、続けて大阪湾近辺において海上から大坂城への物資補給を断つための軍事行動を開始した。木津城はその拠点のひとつとして位置づけられたものと考えられる。なお本城の存続期間については明らかでないが、大坂の陣が終結した慶長20年（1615）にはその役目を終えたと考えるのが妥当だろう。

【評価】以上のように、木津城は大きく二度の戦争において登場したことが文献史料から判明する。ただし「城」としての用例は限られ、さらに所在地・規模・構造に関する具体的な情報は得られていない。そうしたなか『大阪府全志』と『日本城郭大系』は「出城」を比定地とし、さらに後者は規模について『大阪府全志』所引「願泉寺旧記」から「方八町といわれる」と述べた。少なくとも木津川合戦時には木津の集落と木津城は一体的だったと考えるべきであり、そうであれば木津集落の南に隣接する砂堆上が候補地のひとつとなろう。ただし規模や構造を想定することは現段階では難しい。〔大澤〕

淀川の分岐点をおさえる城か け ま じょう ⑬ 毛馬城	【所在地】都島区毛馬町 【年代】天正6年(1578) 【標高】1.8～2.1m 【城将】織田信包・滝川一益・織田信雄・武藤舜秀 【交通アクセス】JR 城北公園通駅より徒歩10分	
--	---	---

【概要】大坂本願寺合戦において使用されたと軍記に記される毛馬城は、現尼崎市の食満か、あるいは現都島区の毛馬のどちらかに当たると思われる。都島区の毛馬は、中世に遡る集落の可能性が高い。

【立地】淀川と中津川の分岐点という交通の要衝に位置している。近代以降の河川改修に伴う開発が激しく、江戸時代に遡る毛馬村の地割はその大部分が失われている。村内の善福寺はもと天台宗であったが寛永19年(1642)に浄土真宗本願寺派に改宗した。

【歴史】天正6年(1578)、反乱を起こした荒木村重は織田信長によって攻められている。12月11日、村重の本拠地・有岡城に対峙する砦を各所に築くよう命じられている。その結果、塚口・毛馬・倉橋・刀根山・郡山・古池田・加茂・高槻・茨木・中島・一ツ屋・大和田に砦が築かれており、毛馬には織田信包・滝川一益・織田信雄・武藤舜秀が入っている(⑬-2)。この「毛馬」は、現在の尼崎市に位置する食満と理解されてきたが、中津川分岐点の要衝に位置する現都島区の毛馬であってもおかしくはない。『陰徳太平記』においても本願寺方の出城としての「飯満」が登場する(⑬-1)が、同様に現都島区の毛馬であってもおかしくはない。

【評価】『信長公記』や『陰徳太平記』に登場する毛馬城が都島区毛馬に所在したと仮定する立場から、周知の埋蔵文化財包蔵地である「毛馬城跡」が設定されている。当地では本調査には至っていないものの、試掘調査のデータが積み重ねられてきている。その結果、中世の遺物が出土した調査地も存在するため、中世に遡る集落の可能性が高いであろう。毛馬城の存否について、現状では結論が得られていない。[岡本]

「江口の戦い」における重要拠点 え なみ じょう ⑭ 榎並城	【所在地】城東区野江 【標高】0.4m 【年代】南北朝～戦国期 【城主】三好宗三・宗渭 【交通アクセス】Osaka Metro 野江内代駅すぐ	
---	--	---

【概要】榎並城は、三好長慶が一族の三好宗三との雌雄を決した「江口の戦い」における拠点城郭の一つとして、軍記に散見される城である。中世の榎並荘は野田、中野、湊上江、善源寺、友淵、毛馬、赤川、葱生、中、江野、南島、森小路、今市、千林、貝脇、上辻、馬場、般若寺、別所、下ノ辻、今福、蒲生、関目、内代、野江二十五村にわたり広がり、上荘と下荘に分かれ、さらにそれぞれが東方・西方に分かれる広大な荘園であった。また榎並には猿楽座があった事が知られ、鎌倉末期には「新座」として京都に進出したほか、南北朝期には「榎並座」と呼ばれ、『風姿花伝』『申楽談儀』などの能学書にもその名がみえる。

【立地】現在榎並城跡に比定されている野江水神社には、三好宗三が榎並城を築城した際、水火除難の守護神として城内に社を建てた場所が現在の境内地であるとの伝承がある。神社周辺は微高地であり、古い地割が

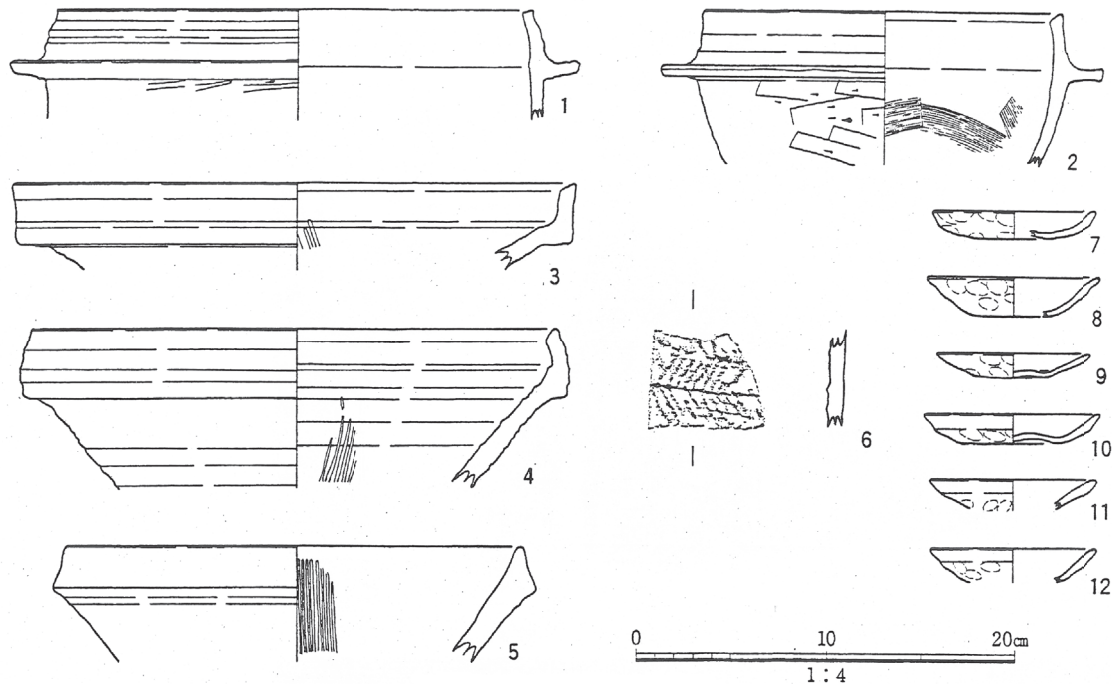


図 24 榎並城跡伝承地 EN01-5 出土遺物（大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2003）

残っている。野江水神社の南西約 80 m、旧野江村の字「^{えのくち}江口」での発掘調査（EN01-5 次）では、13～16 世紀の土師器皿・羽釜・瓦などが出土しており（図 24）、中世段階で人々の生活があったことが推測できる。また同調査では第 7 層上面検出の鋤溝状遺構と第 6 層上面検出の溝における方位の違いが検出されており、14 世紀から 15 世紀にかけて、この地の地割が変化した可能性がある（李 2002、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2003）。微高地から外れるが、字「相堀」には水路があり、榎並城の堀であった可能性もある。この水路を隔て、東西で微高地の地割が異なっている可能性があり、発展の時期差が想定される。

【歴史】『園太暦』文和元年（1352）10 月条に、「吉良以下党類」が摂州榎並に在し、近日山崎に攻め来るといふ風聞が記されている（⑭-1）ほか、『花宮三代記』応安 2 年（1369）3 月 23 日条に、北朝方に転じた楠木正儀が南朝方からの攻撃を受け、天王寺から榎並に撤退するという記事があり（⑭-2）、南北朝時代には榎並一帯が軍事拠点として利用されていたことがわかる。

戦国期の榎並については、『天文日記』『私心記』などからその様子をうかがうことができる。天文 5 年（1536）5 月 27 日、榎並の近所の路次で細川氏の摂津守護代薬師寺氏の手の者が、往還の人々に追剥を行い通行できなくなっていることについて、榎並四ヶ所に使者を派遣している（⑭-4）ほか、同 11 年（1542）3 月 18 日には、「太平寺の戦い」の余波で三好氏が榎並などに侵攻し、放火している（⑭-6）。また同 13 年（1544）2 月 2 日から 4 日にかけて、細川晴元や波多野秀忠が「榎並三好宗三所」を訪れており（⑭-7）、細川氏の拠点が形成されていたことがうかがえる。同 21 年（1552）には榎並は安宅冬康知行となっており、「榎並三人代官」（梶原三河、住路清兵衛、菅若狭）が置かれていた（⑭-19）。

『天文日記』からは戦国期の榎並に善源寺、辻、滓上江、放出からなる「榎並四ヶ所」という単位があり、本願寺の齋を務めていたことがわかる（⑭-5）ほか、齋の頭人を野田・榎並衆が勤める予定だったが、在所が悉く洪水となり困難である（⑭-8）との記録から、榎並一帯が水害の影響を受けやすい地域であったこと

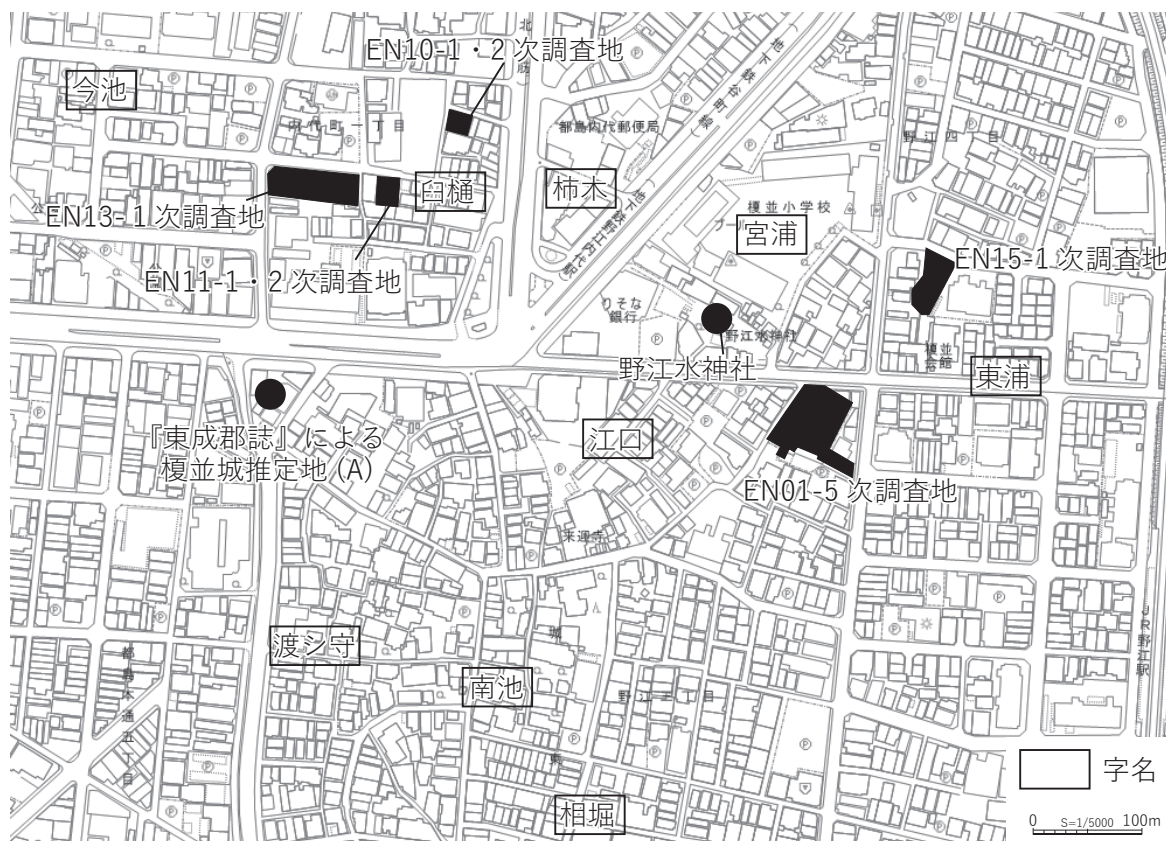


図 25 野江における小字と榎並城跡伝承地の発掘調査地（岡本作図）

も判明する。

「榎並城」については、「江口の戦い」における三好宗三方の拠点として、『細川両家記』『足利季世記』などの軍記にみられる。天文17年(1548)、三好長慶方の十河一存らが河内十七箇所に陣取ったのに対し、宗三の子政勝は榎並城に籠城して対抗した。宗三を援助する細川晴元は瓦林春信を榎並城に入城させている。翌天文18年の長慶勢による攻勢において、宗三の籠る柴島城は落城し、宗三は榎並城に入城するが、「よき城」「究竟の要害」である榎並城は落ちなかったという。そして宗三が榎並城から江口に出陣し、6月24日の江口の戦いで戦死すると、榎並城に籠っていた宗渭らは逃亡したという(⑭-13・14・16・17)。

これ以降榎並城がどうなったのかは不明であるが、慶長 19 年（1614）の大坂冬の陣における徳川方の陣所の一つに「榎並」がみえる（⑭-22）ほか、『陰徳太平記』に、大坂本願寺合戦における本願寺方の砦の一つが「野江」に置かれたという記述があり（⑭-21）、これが榎並城を指す可能性がある。また『摂津志』には榎並城が野江村にあったとの記述がある（⑭-23）ことから、江戸時代には榎並城の伝承があったことが知られる。

『東成郡史』には、榎並城は「大字野江三三六番地（小字渡守）に在り」とされており、野江水神社を推定地とする以外の理解があったことがわかる（⑭-25、図 25-A）。

【評価】榎並城の所在地は諸説あり、その確定は困難だが、発掘調査から、推定地一帯には中世段階から人々の生活があったことがうかがえる。検出された瓦についても、城郭に関連する可能性もあるが、寺院建築の瓦、また井戸瓦の可能性もあり、今後の検討が必要である。文献史料からは、戦国期には細川氏や三好氏の拠点が存在したことは確実視され、その拠点を指して「榎並城」と呼んだ可能性は考えられる。〔谷口〕

本願寺合戦 攻防の拠点	【所在地】 中央区島町1丁目一帯 【標高】 15 m 【年代】 元亀元年(1570)～天正8年(1580) 【城将】 斉藤新五利治、稲葉伊予守良通(一鉄)、 中川八郎右衛門尉重政 【交通アクセス】 OsakaMetro・京阪電鉄 天満橋駅下車南西徒歩5分	
-------------	--	---

【立地】大坂本願寺の西方約1kmに位置する大川(淀川)南岸の上町台地先端の高台にあり、標高15mほどである。大川の上流から下流まで見晴らす位置にあり、北の中島一帯、西方の難波村や津村、南の四天王寺方面も見通せる好地である。

【歴史】三条西実隆(1455-1537)が京から伏見、小坂、天王寺、住吉、堺、根来寺を経て高野山参詣を行う。その帰路、渡辺を通った際のことを日次詠草集『再昌草』^{さいしょうそう}に記述する。「渡辺の渡りすとて、楼の岸、大江殿の跡とて松の一木見えたるもあわれにて、名に立てる その世のままか 尋ねばや 大江の松の 知る人もがな」(大永4年(1524)4月16日条)。渡辺の近くに楼の岸と大江殿の跡があることが知られていた(⑮-1)。『信長公記』巻三によれば、元亀元年(1570)9月8日に大坂本願寺包囲のため織田方が取手を構え、斉藤新五利治(斎藤道三の末子)、稲葉伊予守良通(一鉄)、中川八郎右衛門尉重政の3名を入れる(⑮-2)。9月13日本願寺方が楼の岸砦へ鉄砲を撃ち入れるが防御する。天正4年(1576)4月には本願寺方に奪取されている模様。当初は織田方が築いていたが、本願寺方により奪取されたらしく、本願寺の出城として利用されている(⑮-3)。同年7月17日には瀬戸内の水軍が700～800艘の大船で大阪湾に來襲した際には、本願寺への兵糧を守備するべく、木津急つ田が城と大坂ろうの岸から一揆勢が出陣し、織田方佐久間右衛門勢と戦う(⑮-4)。木津川河口に築かれていた木津砦と並んで、本願寺方の淀川水運を防御する要である。その後、天正8年(1580)の本願寺退去までの間、『信長公記』には楼の岸の名は記載されない。

楼の岸の「岸」は断崖や崖を示す言葉であり、先の『信長公記』によれば砦として利用できる場所にあると考えられ、大川南岸の南崖の上に存在していたことが推測できる。

【検討】楼の岸砦は16世紀前半の三条西実隆の記録や『信長公記』の記載などから、大川南岸の中央区島町1丁目一帯と推定できる。島町1丁目一帯で行われてきた発掘調査で、室町時代末から安土桃山時代の遺構が発見された調査を抽出し、それらの遺構の性格を検討する。

堀と推定できる遺構が見つかった調査地が5ヵ所と、柱列が見つかった調査地が1ヵ所ある。先に堀が見つかった調査地を検討する。堀が見つかったのは、上町台地の北端斜面部にあたる石町1丁目南側街区で行われたOS86-6次調査①、釣鐘町1丁目の南街区で行われたOS88-1次調査②、船越町1丁目の南街区で行われたOS90-51次調査③、島町2丁目で行われたOS87-26次調査④、石町2丁目で行われたOS85-28次調査⑤である。OS86-6次調査①で見つかった堀は、幅約7m、深さ約3m、断面形はV字形で、埋土の下部1.5mは水成層で、上部は盛土であった。堀の方向は上町台地の北側斜面と平行である。出土遺物は16世紀中頃の土師器・瓦器・備前焼播鉢・瀬戸美濃焼皿・唐草文軒平瓦で、概ね16世紀頃を示す。OS88-1次調査②の堀は幅2m、深さ1.5m以上で、水成層で埋

没している。方位は現在の街区方向と同じN 7° Eである。16世紀後半の土師器皿と瀬戸美濃焼丸皿が出土している。OS90-51次調査③の堀は南北方向の壁面で見つかったもので、幅7m、深さ1.5mの断面形は逆台形で、現在の街区と同じ方向で東西に延びる。時期は室町時代末から豊臣前期とされている。OS87-26次調査④では方向が南西方向から北東方向と、現在の街区方向とは異なった堀が3条ある。二つは幅が2.5m、深さ1.1～1.3mで、もう一つが幅0.7m、深さ1.5mである。西端の堀から瓦質土器羽釜が出土している。OS85-28次調査⑤では幅約8m、深さ約2mの堀が見つかった。方向は現在の街区方向と同じ南北方向である。埋土最下部の水成層が堆積し、上部は埋め戻し土であった。時期が判明する遺物の出土はないが、切り込み面から16世紀後半と考える。

柱列が見つかったのは島町1丁目に南接する釣鐘町1丁目北側街区で行われたOS90-50次調査⑥で、直径が30～40cmの柱が立ち並ぶ柱列を2条発見している。一つ(SA201)は東西南北に直角に曲がる柱列で、南西に角がある。柱列の規模は南北14m以上、東西14m以上、柱の間隔は1.2～1.8m、方向は現在の道路方向と同じ北で7度東に振る。もう一つは東西方向に並ぶ柱列(SA202)で、先のSA201のすぐ南に見つかった。規模や柱間隔はSA201と同様である。柱穴から出土した遺物は瓦器や陶磁器で、確実な年代決定の手がかりが少ない。柱列の方向は現在の街区と同じであるが、この方位は本調査地の西方で行ったOS87-81次調査で豊臣期以前に遡ることが判明しており、豊臣期以降も豊臣期以前も同じ遺構方位であるため、遺構の方向では時期を特定することができない。ただ、柱列SA201は敷地を越えて広がる様相を示しており、広い空間を囲う施設の一部である可能性はある(大阪市文化財協会2002a、図26)。

【評価】柱列が見つかったOS90-50次調査⑥は上町台地の北端部から100m程離れた位置で、この一帯では標高が最も高く、広い平坦部に位置する。東にある谷町筋で行われたOS97-1次調査では南北方向の谷地形が見つかった。この場所は地形的には崖を登り切った位置にあり、東には谷で区切られ、北や西に低くなって、周囲を見通せる場所である。詰め城あるいは出城を築くには最適な場所で、柱列で囲まれた空間が砦の一角ではなかっただろうか。また、堀が見つかった5カ所はOS90-50次調査⑥を囲むように分布しており、本願寺方の防衛のための堀の可能性がある。〔松尾〕

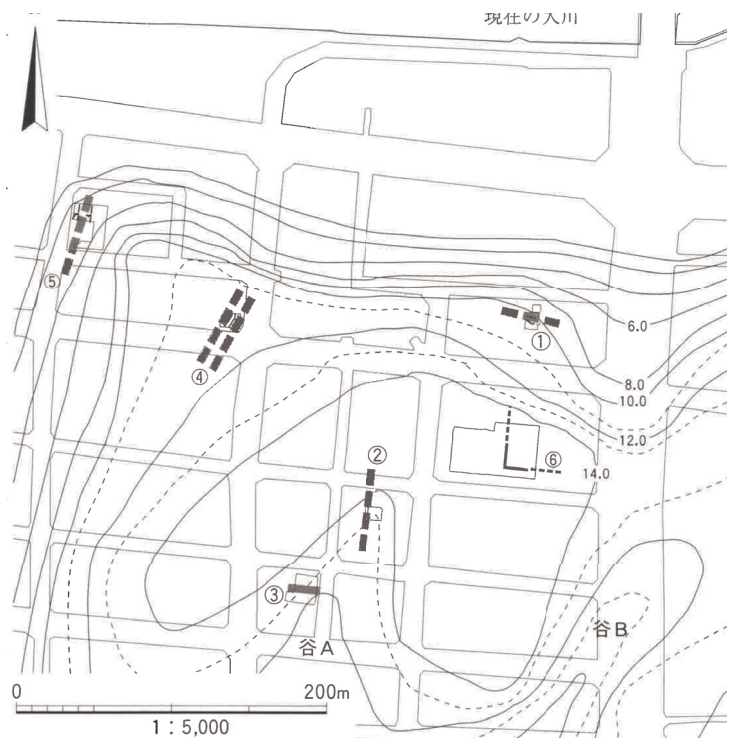


図26 樓の岸岩推定地付近における本願寺期の遺構と地形
(大阪市文化財協会2002a)

都市・天王寺に寄生する城

てん のう じ じょう

⑩ 天王寺城

【所在地】天王寺区生玉寺町～伶人町

【標高】20 m前後

【年代】14 世紀～17 世紀初

【交通アクセス】OsakaMetro 四天王寺
前夕陽ヶ丘下車

【概要】古代以来の歴史を誇る四天王寺を中心としたエリアは天王寺と呼ばれ、中世後期には上町台地上で有数の都市空間が形成された。『大乘院寺社雑事記』明応8年（1499）9月13日条で7,000軒と称された在家は四天王寺の西門前をメインに天王寺へ広がっていたと推測される。それゆえ諸勢力により、支配や軍事の拠点として当地を利用すべく次々と城や砦の建設がおこなわれた。

【立地】天王寺城の推定地は従来二カ所が指摘されてきた。ひとつは近世以来提示されてきた月光寺である（⑩-20、21）。ここは上町台地の西縁辺部からやや内側に入った地点に位置し、寺地の東側から南側にかけて谷地形がめぐっていた（東側は現存せず、南側は現在の学園坂）。その様子は17世紀の絵図（図27）から知られる。もうひとつは伶人町である。ここには「北ノ丸」「中ノ丸」「南ノ丸」の小字が残っていた（図29）。ここは上町台地の西縁辺部にあって崖地形に臨んでいる。

【歴史】現時点における天王寺での城郭の初見は正慶2年・元弘3年（1333）で、六波羅探題軍の手によるものとされる（⑩-1）。次いで天文11年（1542）2月には、細川晴元配下の山中又三郎が籠る城が木沢長政の手によって焼かれている（⑩-2）。この山中又三郎はその後天文15年（1546）8月、「天王寺大塚」に城を構え籠ったところを遊佐長教に攻撃され（⑩-3）、翌9月には喰いとなっている（⑩-4）。この「大塚」は茶臼山を指すと考えられる。

その後はしばらく間が空き、織田信長と大坂本願寺の合戦のなかでもっぱら信長軍の陣として天王寺は登場する。最初は合戦が勃発した元亀元年（1570）8月・9月である。この時、信長軍は天王寺に着陣したが（⑩-5～7）、詳細な場所は不明である。なお軍記物ではあるが、相対する本願寺側が信長軍の天王寺・守口着陣に先んじて「天王寺」に「出城」を構えようとしたところ、四天王寺関係者が詫言事を述べたため、「勝曼の塔」（勝曼院）に城を構え、兵を入れることになったという（⑩-8）。さきの「大塚」も含め、「天王寺」が四天王寺を含む広い空間を指していたことが理解されよう。なお勝曼院は16世紀には存在しており、現存する慶長2年（1597）建立の多宝塔は信長が焼き討ちしたものを豊臣秀吉が再建したと伝えられている。

その後天正4年（1576）4月、信長は本願寺を包囲すべく大軍を送った。その中心となる砦と位置づけられたのが天王寺であった。ここの主将は原田備中で、原田は要害を構え、明智光秀ら重臣がそれを支えた（⑩-9）。しかし、本願寺方の一揆による大規模な攻撃を受けて原田は討死し、明智らは籠城を余儀なくされた（⑩-10～12）。こうした敗色濃厚の状況を打開するため信長自身が出陣し、形勢を逆転させるとともに、天王寺の主将として佐久間信盛を入れ、本願寺の周囲に付城10カ所を置いた（⑩-13）。そして間髪を空けずに信長は平野庄中（大阪市平野区）に対し「天王寺取立之城」の門・家・堀・柱などの普請・作事を命じた（⑩-14）。平野は天王寺からほど近

くにある信長の直轄領であったが（明智光秀は天王寺に入る前に平野へ立ち寄っている）、この動きから信長が天王寺を本願寺攻めの重要拠点と位置づけたことがうかがえる。なおこの時の天王寺をめぐる戦いで四天王寺は全焼したとされる（⑩-15）。この被災の真の理由は不明であるが、四天王寺が双方から協力・支援の要請を受けた可能性は否定できず、それが引き金になったのかもしれない。



図27 大坂三郷町絵図（部分、加筆）17世紀
（大阪歴史博物館蔵）



図28 『東摂城址図誌』より天王寺城址
（大阪府立中之島図書館蔵）



図29 大阪実測図 明治19年測量（清水編1995より）

その後、天王寺は信長軍が掌握し続けた。天正4年（1576）7月の第一次木津川合戦でも佐久間らが天王寺から出陣しており（⑩-16）、天正6年（1578）には明智光秀が天王寺で在番を務める奥村源内に労いの書状を送っている（⑩-17）。信長方の天王寺城に関する文献史料は現状、これが最後である。なお天正8年（1580）3月、信長と本願寺が最終講和を結んだ際、本願寺方に属した「天王寺北城」に近衛氏から人が入れられ、接收されている（⑩-18）。これは明らかに信長の天王寺城とは別物である。また天王寺に置かれた陣城としては、慶長19年（1614）・20年（1615）の大坂の陣時に徳川家康が本陣とした茶臼山も挙げられることを申し添えておきたい（⑩-19）。

【評価】上記のように南北朝期以降、天王寺にはさまざまな主体によって城が築かれた。それらが同じ場所なのかどうか判断は難しいが、ある程度具体性が示される事例を軍記物を含む同時代史料からひろくと①大塚（茶臼山）、②勝曼院、③天王寺北城の三ヵ所になろう。これ以外は天王寺とのみ記され、四天王寺を含め天王寺エリアのどこを指すのか、判断が難しい。一方、近世の地誌や考証図によって信長の天王寺城は月江寺が有力とされ、また小字の検討からは伶人町が城の候補地として指摘されてきた。これらは性格の違う資料・根拠による場所推定であることから、取捨選択にあたっては慎重な姿勢が求められる。

そうしたなかで、②勝曼院と小字「北ノ丸」が近接している点は注意される必要があろう。その東側にあたる大阪星光学院敷地内では幅2.06 m、深さ2.15 mのクランクを持つ南北堀が確認されている事実もある（西近畿文化財研究所2006）。その年代は14～15世紀であり、16世紀の遺物は少ない。字「北ノ丸」「中ノ丸」「南ノ丸」は近世的な呼称との指摘はあるものの（石川2016b）、「北ノ丸」については北・南・西が谷や崖であり、発掘調査で見つかった溝を含めると、周囲を溝や谷で囲まれることになり、1つの曲輪として機能した可能性は否定できない。

天王寺の城のなかでもっとも注目を集めるのは信長の天王寺城だろう。有力比定地である月江寺については【立地】で述べたように、東・南・西に谷地形があり、さらに『東摂城址図誌』（図28）から横矢折れが備えられていたという見方もある（石川2016b）。ただし信長軍の敵である本願寺は上町台地の北端にあって攻撃のために南下してくる。そのため信長軍の城としてもっとも防御を固める必要があるのは北側であったことは自明である。本願寺が「天王寺北城」を出城として保持していたのもまさに信長軍は北からの攻撃に備えなければならなかったことを如実に示している。そうすると、現状で北側に防御施設の復元が難しい月江寺の場所がふさわしかったどうか疑問が残る。

天王寺はどこも西側が上町台地の崖地形となっているので、西側の防御は得られやすい。また東側も自然地形による緩斜面がまちかである。一方、北側あるいは南側の防御機能を高めるためには数少ない東西方向の谷を利用する以外は人工的な「堀」の掘削が欠かせない。その点で注目されるのが四天王寺周辺の検出されている「堀状遺構」である。これは東西方位に限らず、四天王寺中心伽藍を大きく取り囲んでいた可能性があるもので、15世紀を画期に整備されたと指摘されている（市川2014）。特に中心伽藍から離れた外縁部の「堀」は諸勢力にとって利用価値が見出されることもあったのではなかろうか。具体的には上本町遺跡（UH18-3）で検出された東西堀（図30のア）

は幅が8.0～9.0 mと推定され、深さは3.0 m以上と確認されている。さらにこの堀を西へ延長すると月江寺南の谷筋に接続する可能性が指摘されている（平山 2020）。こうした四天王寺に由来する「堀状遺構」が諸勢力の城に利用された可能性も視野に入れる必要があるのではなかろうか。

天王寺城は大塚＝茶臼山を含む広範囲の城に対して用いられた呼称であったことを考えると、それが一ヵ所だけを指すものだったとは考えにくい。個別に具体の候補地を検討していく丹念な作業が求められるといえよう。〔大澤〕



図 30 天王寺付近図（岡本作図）

「明応の政変」の舞台となつた幻の城

しょう かく じ じょう

⑪ 正覚寺城

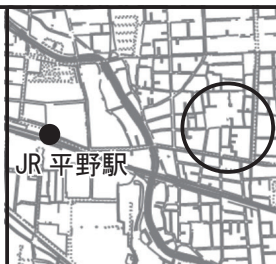
【所在地】大阪府大阪市平野区加美正覚寺一帯

【標高】5.2m

【年代】15世紀～16世紀

【城主】畠山政長

【交通アクセス】JR 平野駅より徒歩約15分



【概要】正覚寺は「明応の政変」時、足利義植・畠山政長が拠ったことで有名だが、正覚寺合戦により焼亡した。その跡地に作られた集落が、江戸時代には正覚寺村として成立し、現在まで地名が残っている。付近には『大阪府全志』にも記載がある、畠山政長の墓とされる墓石が残っているほか、正覚寺六坊の1つとされる東之坊がある。

【立地】東には旧大和川、南には平野川を挟んで平野郷、南西には畠山氏家臣の安井氏が治めていた久宝寺が立地しており、それらの重要地に至近である正覚寺は、政治・軍事・経済的要衝であったと評価できる。

【歴史】『大阪府全志』によれば、寺院としての正覚寺は天長2年(825)、弘法大師によって創建され、東の坊以下六坊の支院を持っていたという(⑪-9)。一方、城郭としての正覚寺は、畠山政長の拠点として確認できる。『大乘院寺社雑事記』文明15年(1483)9月16日条において、畠山義就・政長による犬田城・水主城をめぐる攻防が義就方の勝利で終わった際、「正覚寺之左衛門督方可為迷惑者也」とあり(⑪-1)、当時正覚寺は政長の影響下にあったことが知られる。『多門院日記』文明16年5月27日条には義就が「河内国誉田辺」に城郭を構え「正覚寺之城左衛門^(ママ)守殿」と対陣したと記されており(⑪-2)、正覚寺が誉田城と対比される「城」として認識されていたことがわかる。

正覚寺城は明応2年(1493)の「明応の政変」におけるクライマックスである正覚寺合戦の舞台として著名であり、興福寺大乘院門跡尋尊に近い人物が作成したとされる「明応二年御陣図」にも「屋形 橘嶋正覚寺」と記されている(図31)。ここでは一次資料から、合戦前後の正覚寺についてみておきたい。明応2年2月24日、足利義植は正覚寺に着陣し、畠山政長らの挨拶を受けた(⑪-3)。それを聞いた蔭涼軒主亀泉集証は義植への

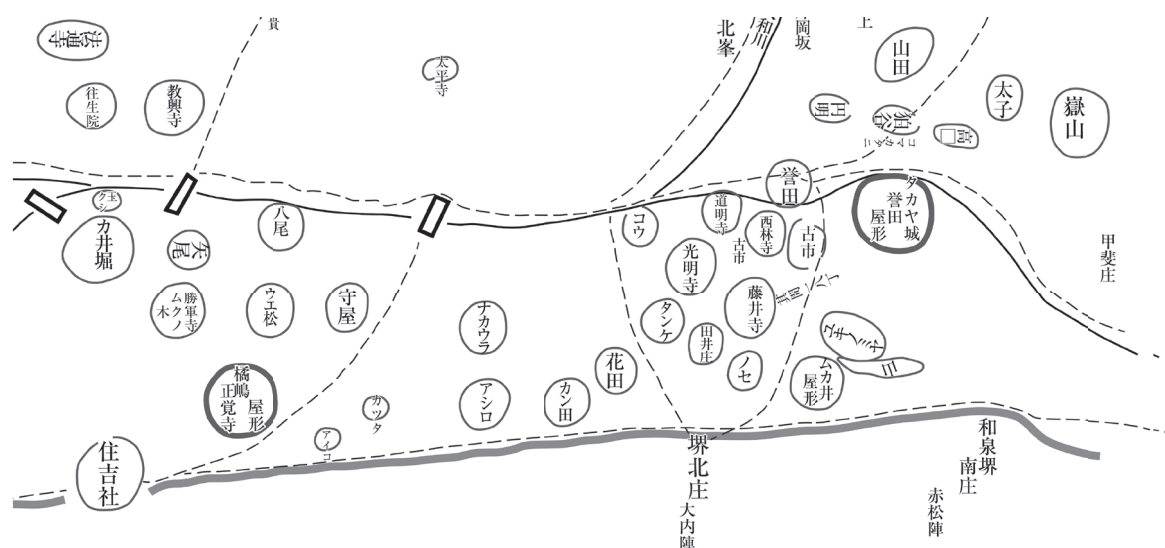


図31 「明応二年御陣図」トレース図(南側)(三原2021)

伺書を侍者の季才宗賢に持たせ正覚寺へ派遣している（⑰-4）。そして義植は「正覚寺内安国寺」でそれらを確認した（⑰-5）。これらの記事から、当時の正覚寺は単なる軍事拠点ではなく、将軍が政務を執ることができ規模をもっており、安国寺など複数の支院から構成されていたことが想定される。しかし同年閏4月25日、細川政元方の攻撃を受けて正覚寺は落城し、政長は自害、義植らは捕縛される結果となった（⑰-6）。

その後の正覚寺については、元龜3年（1572）ごろ三好氏方にあったようで、細川藤孝と遊佐氏との戦闘の舞台となっていることが確認できる（⑰-7）。これに従えば、正覚寺は戦国期までその軍事的機能を保っていたと評価できる。

【評価】本研究の調査対象には、同時代史料で「城」とは呼ばれず、後世の地誌などで「城」とされたものも多いなかで、正覚寺は同時代史料でも「城」と呼ばれた例であり、中世の転換点となった地でもあるため、今後のより一層の調査研究が期待される。〔谷口〕

「楠公十七城」伝承が記録される たつみ じょう ⑱ 巽城	【所在地】 平野区長吉長原 【年代】 南北朝期 【標高】 約 11m 【城主】 楠木正儀か 【交通アクセス】 OsakaMetro 出戸駅より徒歩 5 分	
---	--	--

【立地】長原村は東除川が形成した自然堤防上に位置しており、現状でもその高低差を認めることができる。当地は旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である長原遺跡に含まれている。中世においては、治暦2年（1066）の紀年をもつ「長原里」木簡が出土しており（大阪市文化財協会 2006）、さかんに人の活動が見られる地域である。

【歴史】大正12年（1923）刊行の『中河内郡志』における長吉村大字長原の項目に「巽城」の記載がある。「長原の北一町許の處」に「字巽城」があり、「楠公十七城」の一つと記している（⑱-1）。さらに、昭和36年（1961）の『東住吉区史』もこの評価を踏襲している（⑱-2）。『平野区誌拾遺集』掲載の小字地図（図32）では「巽城」の字名は記録されていないものの、長原村の集落から数百mの地点で「辰巳」の字名が2ヵ所記録されている（平野区誌拾遺集編集委員会 2011）。ただし、巽城との関連は不明である。なお、「楠公十七城」についても、詳細不明である。

【評価】現状では楠公伝承の存在が指摘できるに過ぎない。当地は長原遺跡に含まれていることから、今後の発掘調査によりその実態が検証されることを期待する。〔岡本〕



図32 平野区小字地図「長吉」（部分に加筆）
（平野区誌拾遺集編集委員会 2011）

南北朝時代の山城

うり わり じょう

⑲ 瓜破城

【所在地】平野区瓜破東

【年代】応安4年(1371)

【標高】8m

【城主】楠木正儀

【交通アクセス】OsakaMetro 出戸駅
より徒歩5分

【概要】南北朝期の応安4年(1371)における戦いで楠木正儀の軍勢が拠点とした山城であり、瓜破台地を開析する谷筋に挟まれた尾根の突端に位置すると考えられる。

【立地】瓜破は河内国に属し、北で摂津国の喜連と接している。地形的には、河内台地から北に延びる瓜破台地と、その西側の沖積平野にかけて立地している。瓜破台地は南から北に向かって緩やかに低くなっており、東から「馬池谷」「東谷」「西谷」の3つの谷によって開析される。東瓜破村の集落を中高野街道が南北に通過しており、北に喜連村、南に三宅村へ通じている。また、瓜破に位置する瓜破遺跡は、後期旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡として知られている。

【歴史】『花営三代記』応安4年(1371)11月5日条に「河州宇利和利城寄手南方勢引退云々、湯浅一族凶徒百余人被討」とあり(⑲-1)、瓜破という地名の初見となる。北朝方の楠木正儀が籠る瓜破城を南朝方の湯浅氏が攻め、湯浅氏の軍勢百余名が打ち取られて撤退したという。

【評価】楠木正儀の軍勢が拠点とした瓜破城の所在地については、東瓜破村の「城山」にあてる考えがすでに提示されている(田代ほか編1981、大阪市文化財協会1983)。この「城山」は、東瓜破村における小字名として確認できる。全田家文書のうち「村明細図」(延享2年5月、

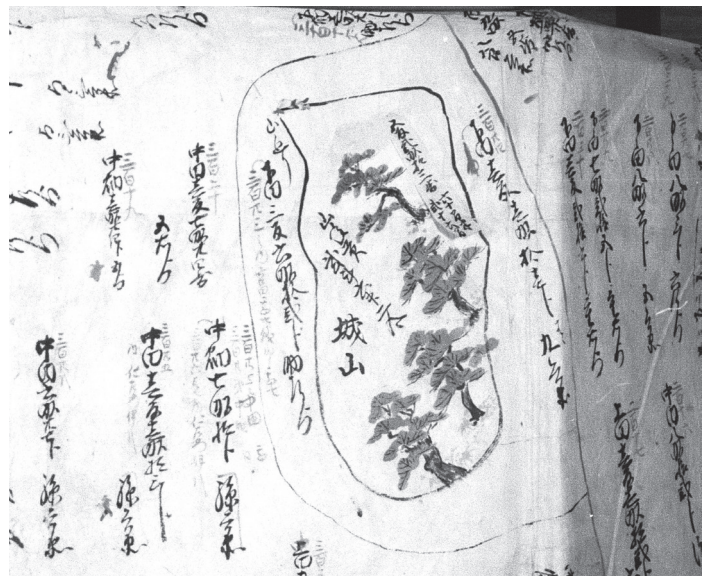
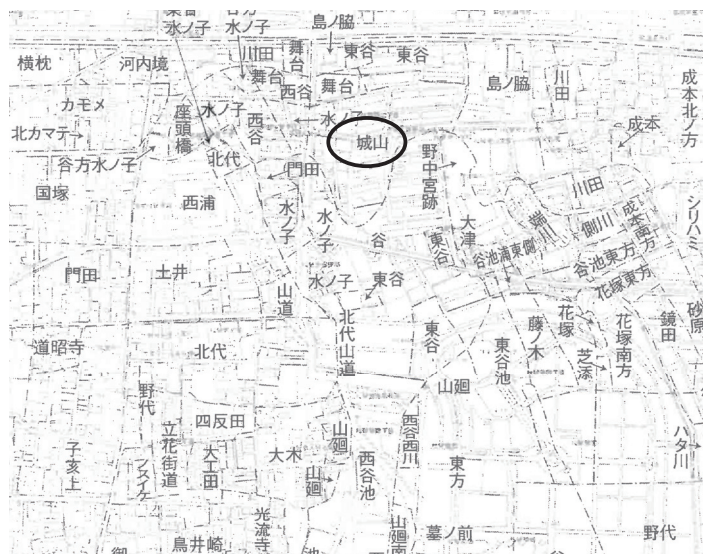


図33 全田家文書「村明細図」(延享2年5月)より「城山」

図34 平野区小字地図「瓜破」(部分)
(平野区誌拾遺集編集委員会2011)

個人蔵、図 33) では、城山の部分に山年貢の記載があり、その廻りを取り巻く田地(山廻り下田)の記載もある。したがって、近世の段階で城山と呼ばれる山が東瓜破村に存在したことは間違いない。この城山が瓜破城跡であった可能性は高い。ただし、従来の研究では小字が確認できるとの指摘にとどまっており、城山の立地する地形に関する検討がされてこなかった。小文では、近世絵図や地籍図から読み取れる城山の立地を、発掘調査成果を踏まえて検討する。明治 20 年(1887)の地籍図(大阪市建設局蔵)や、(大阪市文化財協会 1983)所収の字限図や、平野区小字地図(図 34)を踏まえて、図 33 に見える「城山」と「山廻り下田」の位置を地図上に示すと図 35 のようになる。さらに、瓜破台地を開析する谷筋との位置関係を示すと、城山は東谷と西谷に挟まれた尾根の突端に位置していることがわかる。これらの谷筋は中世の段階ではほとんど埋没していたとの調査成果(大阪文化財研究所 2011)が提示されているものの、近世絵図を参照するとその名残と思われる池が多数存在していたことが確認できる(個人蔵「貞享五年東瓜破村下絵図」、大阪市文化財協会 1983 所収)ことから、やはり中世段階でも比較的低い土地であったことには変わりないと考えられる。以上の条件から、城山は谷筋に囲まれた尾根の突端に位置しており、城を構えるのにふさわしい場所であったといえる。さらに、中高野街道から 300 m ほどの距離にあり、地域の交通を掌握する場所でもあった。中高野街道は南朝の拠点である南河内に通じる重要な街道であり、その街道に接する瓜破に城が構えられた可能性もある。〔岡本〕

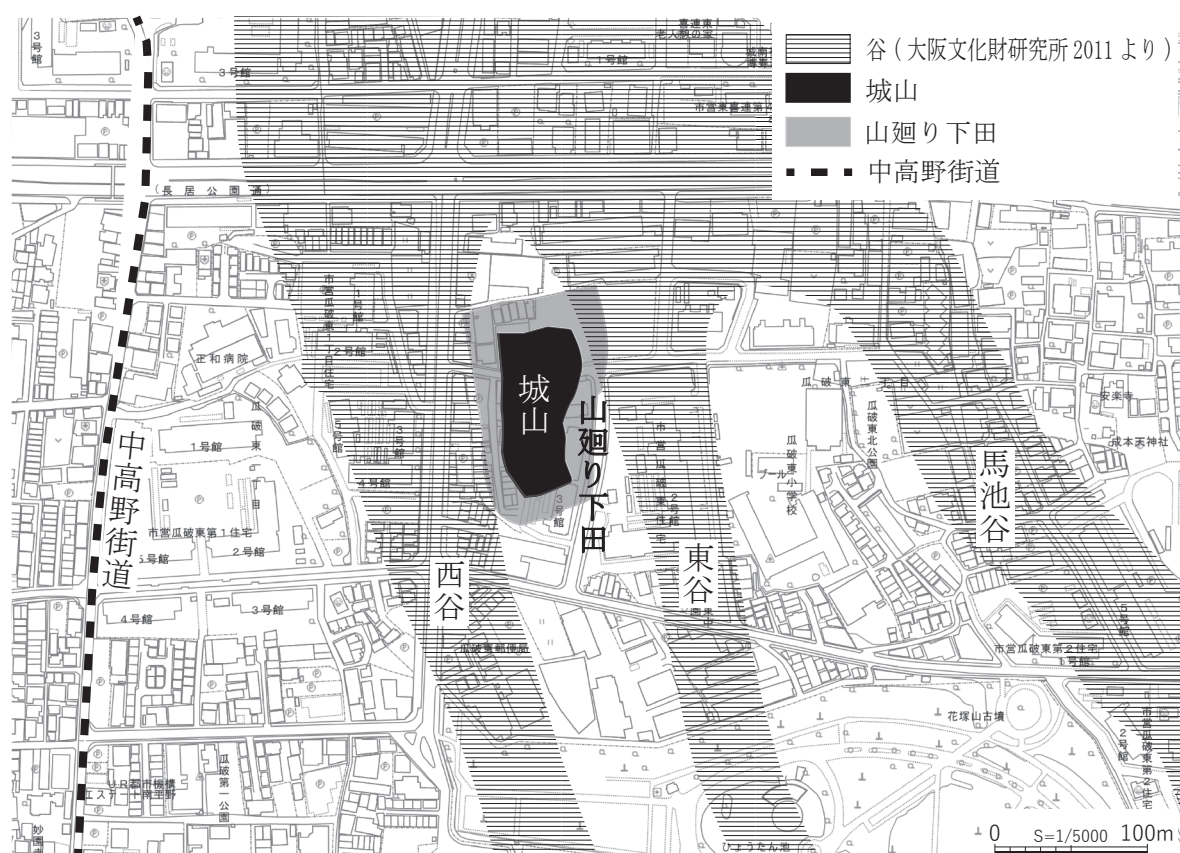


図 35 瓜破城推定地と谷筋の位置